

お湯のある風景

お風呂と、お湯の
ある暮らしを解く

第3回

人々の欲望と宗教・ 思想に揺れ動いた 世界のお風呂の歴史

(その2)

水道や浴場施設の整備に優れた能力を発揮して壮大な入浴文化を築き上げたローマ帝国。その文化を自らの風土に合わせて省エネ化も図って長く続く入浴文化を築き上げてきたイスラム圏。この連載では前回まで、それらの風景をたどってきた。そして、現代にまで通じている欧米の入浴は、どのような歴史を経てきたのか、それを以下で確認しよう。

風紀の乱れ、繰り返す 入浴習慣の受け入れと禁止

厳格なキリスト教徒は、快楽や欲望に陥った浴場文化を遠ざけ、むしろ水や湯に触れないこと、身体を洗わないことをキリスト教の強い信仰心として誇るようになった。共同浴場は人々からあえて遠ざけられ、忘れられ

た。そして、不潔で悪臭の極めて長い時代を迎えた。もともと、こうした時代でも入浴は洗礼など宗教上の儀式や健康、治療目的としては一部残され、司教や要職者の施設では入浴が行われた。また、英国ではローマ時代の共同浴場は主に貴族が使用したとされる。共同浴場が再び注目されるようになったのは、12世紀に遠征から帰ってきた十字軍が東方イスラムの入浴を西洋にもたらしてからである。イスラムのハマームをまね、心身を清め、身体の養生、回復のため入浴を行った。冷浴および温浴は一般の人々にも広く受け入れられた。中には自宅に風呂を持つものも出てきた。ロンドンでは14世紀頃、沸かしお湯を大きな樽に溜めて、人々は中に入ったり外で身体を洗ったりした。パリでは13世紀頃、ほとんどの街に蒸気風呂があり、蒸風呂通りというような名前までついた。14〜15世紀に

かけ公衆浴場は多く設けられたが、栄えてくると再び風紀が乱れる。そして15世紀以降徐々に禁止措置が取られることになった。1546年、ヘンリー8世の命によりロンドンの浴場は永久的に閉鎖される。その後、1550年から1750年頃にかけて再び汚泥と悪臭の中に身を沈める「不潔な200年」時代を迎えるのである。都市化が進み始めた時代であったが、まだ下水処理はなかった。都市汚染が進み、清水を補給するのが困難となっていた。こうした時代、疫病の流行やその恐れから、水は身体を蝕むもので、その脅威から身体を守る必要があると信じられた。共同浴場にひそむ不潔さにも十分用心が必要で、お湯のために皮膚の穴が開き大気の「瘴気」が体内に侵入して発病すると考えられた^{※1}。その一方で、16〜17世紀にかけて医学的治療の一環としては入浴が行われてもいた。やがて、医学的な進歩があつて18世紀になると冷水浴による健康促進が図られ奨励されるようになる。

※1 西洋の不潔な都市の象徴は、排泄物を屋外に投じることだった。道路であつてもかわらず汚物が捨てられ、都市は汚物に覆われていた。こうした西洋都市に比べ、同年代の江戸では、下肥(しごこ)も高値で取引され、田畑を肥沃にし、野菜を育てた。江戸では、道端の紙くずすら再利用されるなど循環型社会が形成されていた。

水道管の敷設により清潔な水を得て、 身体を清潔にする時代

17世紀にロンドンで長さ65kmに及ぶ人工水路がつくられロンドン北部の中心部まで清潔な水が得られるようになった。榆の木ででき

た配管が都市街路に埋められ(19世紀に鉄管に交換)、ところどころに鉛製の「羽柄(うへい)」という小さなパイプが付けられ、各家庭の地下台所の水道管と繋がった。当初、給水は不安定で事故も多く、週に一度、街路ごとに水の日を決め、家庭では貯水槽などに水を溜めることに励んだといわれる。家庭に水道管が引かれるとその蛇口がたとえ1カ所でも身体を洗うことが楽になり、いくら不潔の時代でもタオルで顔や身体を洗うことはしていたようだ。

18世紀になり宗教が「清潔は敬神に次ぐ美德」であると説き、信仰生活を送る上でだしなさを嫌う考えを広めはじめた。その清潔思想が定着するには時間を要した。英国では19世紀になっても入浴は日常生活に組み込まれなかった。その後、入浴が進取の気性に富む紳士の証であるとした風潮が広まり、入浴は単なる健康維持や宗教的義務でなく社会的義務※2へとかわり、その習慣が一般に普及するようになっていく※3。

※2 欧米では19世紀になると、近代国家を支える国民には、清潔であることが強く求められるようになった。

※3 英国近代水道は、1808年にグラスゴー水道会社が、数日間の沈殿と砂・砂利ろ過池によるろ過を経て給水したことが始まりとされる。1812年には鍛造鋼管が造られ、配管技術も進歩した。1847年の水道事業条項法で適正な水圧や水量の確保、汚染防止など、水道事業の要件も制度化された。

王族、貴族から始まった個人風呂

18世紀。虚飾がもてはやされた時代、ヨーロッパ貴族は競って個人風呂を設置した。そ

の風呂は衛生観念に欠けていた時代であり、清潔のためにしつらえたわけではなかった。しかし、フランスの王族は、みな宮殿に壮麗な浴室を作り豪華な家具として浴槽を設置した。ルイ14世(1638～1715年)の時代に铸铁製パイプが導入されベルサイユまで水を運ぶことができた。ルイ14世の浴槽は金メッキを施した豪華なもので、その宮殿には少なくとも100の浴室があったといわれる。当時、大邸宅の備え付け浴槽として用いられた大理石は、重く高価であったので数は限られた。移動可能なものとして木製が使われた。木製浴槽は銅や鉛で裏張りされた。銅製のものも人気があった。金属浴槽が出てから銅のシリンドラー(ヒーター)付もあったよう、当時として高価なアルコール燃料が使われた。米国は1815年ホワイトハウスに最初の浴槽が設置されて個人浴槽を持つことがステイタスとなった。また、南北戦争を通じて、水で清潔に保つこと、衛生観念の重要性が認識され一般に広める努力が始まっていた。19世紀半ば、米国では「土曜の夜の入浴」が流行した。個人入浴が盛んになるにつれ、浴室機能の改善が求められるようになった。

水道施設が個人風呂を広げていく

19世紀後半、欧米では多くの都市に水が供給されるようになった。水道は、まず地下室に入り、次いで各階に1カ所、最後に各戸、そして台所、浴室へ入るようになった。

英国で1860年以前は、本来浴室でない

部屋に浴槽を置き、召使に沸かしたお湯をこぼさないよう運んで入れさせるという信じられない苦役を強いていた。入浴後は浴槽の残り湯をまた階上から地下室まで持って降りなければならなかった。1812年、ガス供給が商業化され、1850年頃には浴槽に設置した加熱装置で浴湯を温める試みがいくつもされた。階上の浴室に水道が引かれ1860年代以降は召使の苦役はなくなった。自動加熱装置付き浴槽が次々に登場し、ロバート・ウィルヘルム・ブンゼンが発明したとされるガス風呂釜がその代表である。上流階級の邸宅には、「ゴードン將軍」「アルバート公」など華々しい名前が付けられた同様のガス風呂釜が備え付けられた。しかし、これらの装置は湯が沸くのに半時間ばかり、熱い湯にならないなど不満も多かった※4。

※4 日本は江戸時代から、薪や木炭で焚く五右衛門風呂などの実践経験を積んでいた。一方、欧州にはこうした方法がなく、金属浴槽になってからは単純に加熱すればよいと考えられていたようで、事故も多かったとされる。さらに、お湯が冷めたらまた沸かす「追い焚き」の考えはまったくなかった。『風呂トイレ賛歌』ローレンス・ライト、高島平吾訳、晶文社、1989年

ホテル仕様が米国住宅の浴室設計に

米国住宅の浴室の起源はホテルにあった。米国は1890年代給水設備が整備され、給湯を備える集合住宅などの試みがいくつもされた。ホテルは各戸ごと寝室の横に浴槽を設置した設計が増え1910年代に定着する。米国人はホテルを通じ浴槽や蛇口をひねればお湯と水が出る便利さを経験した。そして水



米国のホテル仕様の浴室（イメージ／Geminiで作成）

洗便所や蒸気暖房設備も知った※5。それを自宅に求めた。浴槽、洗面器、便器を最小限の空間に詰め込んで配管した「コンパクトな浴室」空間を寝室の横に配する設計が1910年代に確立した。1908年のホテル浴室では、浴槽はまだ脚付きだったが1915年のホテルは埋め込み式浴槽が設置された。いずれも壁固定式のシャワー設備が当たり前のようについていた。

一方、英国は、世界に冠たる贅沢な浴室空間をつくった。質と格調で1880年から1910年の間、英国衛生設備に比較できるものはないといわれる。窓のある広々とした浴室に磁器製浴槽、複雑なシャワー設備、ビデ、便器、大理石製洗面器などがゆつたりとした間隔で置かれ、体操ができそうなほど十分な空間があった。こうした豪華浴室は、自由な

設計で邸宅や王宮などに設けられたが、その一方で資力に応じ安価な浴室もつくられた。英国型浴室は一家屋に一式設けるのみで家族全員でそれを使用した。その英国では、20世紀初頭になっても、大邸宅でさえ浴室を設置していない場合が多かった。1919年に英国政府が設計指針「ハウジングマニュアル」を示した後も、労働者階級の住宅に冷温水設備付きの浴槽が普及するまでには時間を要した※6。

※5 『機械化の文化史』S・ギードイオン、GK研究所・栄久庵祥二訳、鹿島出版会、1977年

※6 『風呂トイレ賛歌』ローレンス・ライト、および『暮らしのイギリス史』ルーシー・ワースリー、NTT出版、2013年

社会システムが整った現代の入浴

欧米の入浴が一般の人々に広く普及するのは相当な時間を要したようだ。しかし、科学技術のさらなる発展、産業振興、そして国家政策による衛生観念の定着など社会システムがいち早く整った欧米では、健康で快適、清潔な暮らしのための入浴が広まっていた。

一般的に欧米の人々の入浴は日本人が考えるものとは大きく異なる。現代においてもキリスト教の厳格な宗教意識と長く続いてきた過去からの慣習を強く引きずっていると感じる。裸になることの羞

恥、他人に見せてはならないだけでなく言葉で表してもならないという意識。性道德の乱れに対する禁欲的ともいえる裸と入浴行為に対する根強い抵抗。こうした意識がどこかにあって、日本人のような温泉や銭湯での裸の付き合いも、なみなみと湯に浸かることも、恐ろしいことで、あつてはならないという人は多いようだ。今にいたっても入浴習慣すら持たない人々もいるくらいである。入浴は煩わしい行為とする人も多い。バスタブにお湯を張る時でも、浅いバスタブに半分か三分のいくらいしか湯を入れない。それも体温くらい温かい湯である。身体を洗うのはもっぱらシャワーだ。それもバスタブの中に入って短時間で済ます。長い時間を入浴にかけると、清潔に保つ純然たる機械設備という意識で、入浴は歯を磨く行為と何ら変わらない。

日本人の熱いお湯に親しむ、恍惚とする文化は、諸外国ではほとんど見られない珍しい風景なのかもしれない。その日本の入浴の歴史を、次回から確認していこう。



村田 幸隆
むらた・ゆきたか

一般財団法人ベターリビング
アドバイザー

1973年東京ガス株式会社入社
住宅性能および住宅設備、部品の開発、評価業務を担当。また、住宅産業に関わる諸団体事業に幅広く関与。2012年住宅保証機構株式会社監査役、同一般財団法人ベターリビングサステナブル居住研究センター副センター長、2019年より現職。